ヒュームにおける「情念に関する自己」の位置づけ

岡村太郎

0. はじめに

デイヴィッド・ヒュームは『人間本性論』[(1)]（以下『本性論』とする）において、自己・人格の同一性を二つに分ける。それは「思惟または想像に関わる人格の同一性（以下「想像に関する自己」と略記）」と「情念とわれわれ自身に対する気遣いとに関わる人格の同一性（以下「情念に関する自己」と略記）」の二つである(T 1.4.6.5) [(2)]。「想像に関する自己」は『本性論』一巻四部六節で展開され、「知覚の束」として論じられるものであり、「情念に関する自己」は二巻の情念論の中に登場し、情念の対象として論じられるものである。「情念に関する自己」は「想像に関する自己」を強める corroborate とされる (T 1.4.6.19)。

しかしこの自己の区別の意味をヒュームは明示的に語らないのであり、これをどう理解するかが、ヒュームの自己論解釈において一つの争点となってきた。たとえばアメリー・ローティは、前者を「知覚の観察者としての自己」であり後者を「行為者 agent としての自己」であるというように理解する (Rorty, 1990, pp.255-257)[(3)]。しかし「情念に関する自己」を行為者として解釈するといっても、行為者という言葉をヒュームは使っていないのであり、その行為者性がヒューム哲学の語彙の中にどのように位置づけられるかは明確でない。またヒュームは情念論においても「知覚」という道具立てを保持しているのであって、主体は常に知覚の観察者であるはずである。ローティに見られるように、これまで「情念に関する自己」の実質的な意味は明確にされてきたとは言い難い。このような状況を踏まえて、本稿では「情念に関する自己」をヒュームの知覚論の中に位置づけることを試みたい。

具体的には以下のような手順で論を進める。1 節においては、ヒューム哲学において「関係の観念をもつ」ことと、「その関係、性質に注意する」ということは別個のことであるということを確認する。2 節においては、「想像に関する自己」を概観するとともに、「情念に関する自己」が集中的に説明される間接情念論を概観する。3 節においては、この「情念に関する自己」が自己を成す関係に「注意する」観点の成立であるという見方を提示する。これによって、「情念に関する自己」はその自己を成す関係、性質に注目する観点が成立したものであり、これはヒュームが「関係の観念」に用意した道具立てにあてはまると結論したい。

1. 二つの関係の観念

まず、ここでは「第二種の関係の観念」と「第一種の関係の観念」というヒューム哲学の基本的な道具立てを確認する。

1.1 第二種の関係の観念

ヒュームによれば、「類似性 resemblance」という関係には、性質を共有することなしに類似性と見なされるものがある。

> 異なる単純観念さえたがいに類似し得ることは明らかである。しかも、それらの類似点は、それらの相違点から、必ずしも別個でも分離できるものでもない。例えば、青と緑は、異なる単純観念であるが、青と緋色よりも、たがいにより類似している。しかし、それらの完全な単純性のために、(類似点と相違点の）分離または区別の可能性は、まったく排除されている。事情は、個々の音や味や香についても同様である。これらは、同じであるようなどんな共通点ももたずに、全体的な見かけと比較に基づいて、無限に多くの類似性を受け容れるのである。(T 1.1.7.7.n5)

青の単純観念と緑の単純観念は類似しているのであり、そこには類似性の観念が成立していると言える。しかしそれらは単純観念であるので、それ以上分解することができず、共通性質が見いだされない。こういったいわば「自然的な類似性」(Garrett, 1997 p.51) は「全体的な見かけ」に基づくのであり、知覚の性質に基づいているわけではない。こういった性質を共有することなく得られる類似性を木曾は「第二種の類似性」と呼ぶ(木曾, 1995, 455頁)。これに倣って、「どういった点で関係しているのか」、「どの性質に基づいた関係なのか」が知られていない関係の観念を「第二種の関係の観念」と呼ぶことにしよう。

1.2 第一種の関係の観念

しかし、性質に着目することによる、より通常の意味での類似性がないわけではない。こういった類似性は「第二種の類似性」を条件とした「理性的区別 distinctions of reason」を経て見いだされる。それをヒュームは「白い大理石の球」の例を使って説明する(T 1.1.7.18)。「白い大理石の球」のみが提示されるとき、その時点では白い印象が配列されるだけでそこにどんな関係が見いだされるかは、それとしては知られない（これが性質の共有に基づかない「第二種の類似性」である)。そこに「黒い大理石の球」や「白い大理石の

立方体」が提示されるとき、それらを「白い大理石の球」と「比較」することでそれらの知覚がもつ「球」や「白」という「類似性」の関係が浮き彫りになる。これによって、単独の事例ではそこに何の性質も見いだされなかった白い大理石の球を、「白い」ものとして見たり、「球体」として見たりすることができるようになる。

しかし白い球というのはそれ以上分解できない単純知覚であるのだから、その白や球といった性質はそれぞれ別個な「知覚」ではあり得ず、「実際に同じもの」(T 1.1.7.18)である。それはそれ以上分割できない単純知覚のうちに異なる観点を見出すことであって、その観点それ自体が別個な知覚であるわけではない(Garrett, 1997, p.63)。あくまで「大理石の球という形を考えようとするとき、実際には形と色の両方を含む一つの観念を抱く」(T 1.1.7.18)のである。

1.2.1　抽象観念としての第一種の関係の観念

しかし、それ以上分割できない知覚の内に異なる観点を見出す、とはどういうことか。この説明のために、ヒュームは「抽象観念についての先の説明に頼らなければならない」(T 1.1.7.18)と述べる。

ヒュームは抽象観念を次のように説明する。

> すべての一般観念(抽象観念)とは特定の名辞に結び付けられた個別観念に他ならず、この名辞が、個別的観念により広範な意味を与え、必要に応じて個別観念をしてそれに類似した他の個別者を呼び起こさせるのである。(T 1.1.7.1)

抽象観念とは個別観念を完全に捨象したものなのではなく、「別の類似した個別観念を呼び起こす」個別観念である。これにのっとれば、関係の抽象観念は、類似したその関係を呼び起こす、ある関係をもつ個別的な諸知覚であるということになる。白い球に成立している「球」という類似性は、例えば黒い球体を呼び起こすと言う点で、それ自体個別的でありながら、球という類似性の抽象観念であるということができる。

> ある人がわれわれにその色を考えずに白い大理石の球の形を考えるように望むとき、彼は不可能なことを要求しているのであるが、彼の真意は、色と形を一緒に考えながらも、なお黒い大理石の球とのあるいは任意の色または任意の物質の球との類似性に注目せよ、ということなのである。(T 1.1.7.18)

あくまで類似性という「関係の観念」は諸知覚から分離できるものではなく、その関係の内にある他の個別的な知覚を呼び起こす、抽象観念なのである。ギャレットの言葉を借りれば、それ以上分割できない単純知覚が「適切なクラスの類似した知覚」(Garrett, 1997, p.64)と連合することによって、そこに成立している類似した性質が「注目」されるようになる。

以上を踏まえてヒュームの「理性的区別」の説明を再構成すると次のようになる。「白い大理石の球」間に成立している「第二種の類似性」は、その性質に着目することなく「自然に」抱かれる。これに対し、「黒い大理石の球」などの類似した関係をもつ知覚を経験し、それらを「比較」することによって、「球」という類似性が浮き彫りになり、性質に基づいた類似性の萌芽が見いだされる。さらにこうした経験を積むと、球の抽象観念ーすなわち他の球という性質をもった(適切なクラスの)個別観念を呼び起こす個別観念ーを形成し、その類似性に注目する観点を獲得するに至るのである。このような、知覚の性質に基づく、知覚間の関係に「注目」する観点が成立しているような関係の観念を、先と同様木曾に倣って(木曾, 1995, 455 頁)、「第一種の関係の観念」と呼んでおく。

1.3 その他の関係の観念

このような関係の観念の説明は、空間、時間という関係についても適用されており、ヒューム哲学の基本的な枠組みをなしているように思われる[(4)]。

たとえば延長の観念[(5)]とは、それに対応する単一の印象が存在するわけではなく、「色をもつ点の模像、すなわちこれらの点の現れ方の模像」(T 1.2.3.4)である。ヒュームによればこの色の現れ方のコピーは、まぎれもなく「延長の観念」であるが、そこにおいては延長の観念は延長として認識されることがない。

> （延長の観念を成す）点が紫色をしていたと仮定せよ。その結果、その（延長の）観念を繰り返して思い浮かべるたびに、われわれはそれらの点をたがいに元と同じ秩序に配列するだけではなく、それらの点に、われわれがただ一つ知っているまさにその色（紫）を与えようとするであろう。(T 1.2.3.5)

ここにおいては、紫色から構成される延長という複雑観念において、色と延長という関係を分けて考えることができない、つまりその複合観念の延長という性質に「注目」することができない。これが性質の認識に基づかない「第二の関係の観念」に当たるであろう。延長の観念を延長として捉えるには、先ほどの理性的区別と同様の、他の類似した対象との比較による。

のちに、そのほかのすみれ色、緑、赤、白、黒などの点や、これらの色の種々の混合色を経験し、これらの色を構成する色の点の配列に類似性を見出すと、われわれは、できる限り色の特殊性を捨象し、これらの色の一致点であるところの点の配列、すなわち点の現れ方にのみ基づいて一つの抽象観念を作るのである。(ibid.)

紫色の点の集合から成る延長の観念と、すみれ色をした点の集合から成る延長の観念を「比較」することで、延長という関係に注目することができる。そのような経験を重ねるうちに、延長の抽象観念が形成されるのである。これは先の「第一種の関係の観念」と同形であろう。

また時間も「知覚の継起」に由来し、それ自体単純な知覚ではない。

時間の観念は、他の印象と混在しつつそれらから明瞭に区別できるような特定の印象から生じるのではなく、もっぱら諸印象が精神に現れる際の現れ方から生じるのであり、その際時間は、それら諸印象の一つではないのである。たとえば、笛で演奏される五個の楽音は、時間の観念と印象を与えるが、時間は聴覚やその他の感覚に現れる第六番目の印象ではない。(T 1.2.3.10)

音の継起は時間の観念を与えるのであるが、この事例のみでは、複数の「音」と「時間」を分けて考えることができず、時間という関係に「注目」することはできないのであり、これは「第二種の関係の観念」である。この観念を踏まえて、「そしてのちには、この現れ方を、これらの特定の音を考えずに考察し、任意の他の対象に結び付けることができる」(ibid.)のであり、経験を重ねることでその関係に注意することができるようになる。このようなステップを踏むことで時間という関係に「注目」することができるようになるのであり、これが「第一種の関係の観念」である。しかし「何らの対象の観念ももっていなければ、心は決して時間を思う浮かべることができない」(ibid.)のであって、あくまで時間の抽象観念とは、別の類似した時間の観念を呼び起こす個別観念なのである。

2. 自己の観念

この二つの関係の観念が、二つの自己の観念に対応すると結論したいわけだが、そのためにまずここではその二つの自己を概観する。

2.1 「想像に関する自己」

いわゆるヒュームの自己論ということで参照されるのはこちらの自己である。ここでヒュームは類似・空間・時間といった関係の観念を語る際と同様の口調で、個別的知覚と別個な自己の観念を否定する。注意しておかなくてはならないのは、ヒュームは自己の観念それ自体を否定したわけではない。要点は、個々の知覚と別個な自己の観念はないということである。ヒューム自身が『本性論』をまとめた『人間本性論摘要』において、この点が明確にされている。

> デカルトは、思考が心の本質であり、それは「この思考」「あの思考」ではなく、思考一般であると主張した。これは絶対的に理解不可能である。というのは、すべての事物は存在するとき個別的だからである。それゆえ心を合成するものは、われわれのいくつかの個別的な知覚でなくてはならない。(T Abstract 28)

こういった問題意識から、自己とは「知覚の束あるいは集まり」(T 1.4.6.4)と主張されることになる。

時間の観念が、五つの音の印象に連なる第六番目の印象ではないのと同様に、自己は様々な諸知覚と並列される知覚ではない。自己の観念は知覚間の関係に存する。具体的には知覚間の「類似」と「因果」という関係に存する。過去の知覚と現在の知覚が類似している時、「これらの類似した諸知覚を思考の連鎖のうちに置くことは、必ず想像力を一つの環から別の環へと容易に運び、（思考の連鎖の）全体を単一の対象の連続のように見えさせる」(T 1.4.6.18)。また因果関係については次のように言われる。

> 人間の心についての真なる観念は、たがいに原因と結果の関係によって繋がれ、互いに他を生み出し、消滅させ、他に影響を与え、他を変容させるところの、たがいに異なる諸知覚すなわち異なる存在者から成る、一つの体系と見なすことである。(T 1.4.6.19)

あくまでこういった関係は実在的な関係ではなく、「習慣的な観念の連合に帰着する」(T 1.4.6.16)ものであるが、この類似と因果の関係こそが自己の観念ということになる。

2.2 「情念に関する自己」

次に「情念に関する自己」がどのように描写されているかを見ていこう。「人格の同一性

について」という節が割かれていた「想像に関する自己」と異なり、ヒュームはこの自己について、１節を設けた自己論としては語らない。情念に関する自己は、主題としてではなく間接情念論の欠かせない一概念として登場する[(6)]。それゆえ、代表的な間接情念である「誇り pride」の説明を概観することで、そこでの自己に着目することにしよう。

誇りは間接情念 indirect passion の一種に分類される。情念は「いかに多くの言葉を費やしても正しい定義を与えることはできない」(T 2.1.2.1) ものであるが、間接情念は、他の性質、観念を介して「間接的に」生じるものであり、われわれは「情念に伴う諸事情を枚挙して、これによって情念を記述する」（ibid.）ことができる。それゆえここでヒュームが行っているのは情念の内容を説明するのではなくて、その情念が発生する「因果的条件」を示すということであると言える。その間接情念の「因果的条件」を以下で見ていこう。

2.2.1 誇りの原因

まず誇りはその「原因」をもつ。この原因は「われわれ自身の一部であるか、われわれと密接な関係のある何ものか」(T 2.1.5.2)でなくてはならない。自分と密接に関係しているという条件を満たせばよいので、この原因のうちには様々なものが含まれる。それは心のあらゆる優れた性質（機知、良識、学識、勇気など）や身体的な性質（美貌、強さ、機敏さ、ダンスの身のこなし）、また自分の外のもの（国、家系、子供、親類、富、家、庭園、馬、衣服）にまで及ぶ (T 2.1.2.5)。また、誇りの「二次的原因」として、ヒュームは「共感 sympathy」という原理を提示している。

> ある情念が共感によって精神に注入されるとき、最初はただ結果によって知られるだけである。換言すれば、表情や話し方などにおける外的しるしによって知られるだけで、このしるしが情念の観念を精神に与えるのである。そしてこの観念はすぐに印象に転換する。（T 2.1.11.3）

単純にいってしまえば共感とは他人の気持ちを感じることができる原理であり、この他人の気持ちによって賞賛された「原因」によって、例えば自分の家を他人に褒められることによって、誇りは生まれるのである。

2.2.2 誇りの対象としての情念に関する自己

以上のような原因をもつ誇りは、「対象 object」として自己の観念をもつのだとされる。これが「情念に関する自己」であるように思われる。

（誇り、卑下といった）情念は、喚起されたとき我々の視線を一つの観念へ向ける。その観念が自己の観念である。するとここで、情念は二つの観念の間に置かれることとなる。その一つは情念を生む観念であるし、他方は情念によって生み出される観念である。それゆえ、最初の観念は情念の原因を表し、第二の観念は情念の対象を表すのである。（T 2.1.2.4）

情念を生む観念は先に述べた「原因」であり、対象が自己の観念である。これをヒュームは「誇りという情動はこの自己の観念を必ず生み出す」(T 2.1.5.6)という風に表現しているが、ペネラムも指摘するように、ここで自己の観念が初めて発生するという風には考えられない(Penelhum, 2000, pp.93-94)。なぜなら先に確認したように誇りの原因は何らかの自己の観念と関係をもっていることが必要なのであるから、誇りが生まれる前にすでに自己の観念をもっている必要があるからである。よって、原因と関係をもっている「想像に関する自己」があって、誇りという情念が生まれ、その情念の対象となるのが「情念に関する自己」であるということになる(7)。ただこのメカニズムにおいて、誇りの前と後の自己の観念の身分は一見して定かではない。それを次節で具体的に検討しよう。

3. 「第一種の関係の観念」としての「情念に関する自己」

このように二つの自己を概観した上で、それぞれが一節でみた二種類の関係の観念に対応するという見方を提示したい。

3.1 「想像に関する自己」と「第二種の関係の観念」

「想像に関する自己」がその関係に「注意」が向いていない「第二種の関係の観念」なのかは直ちに明らかではないが、個々のヒュームの記述から読み取ることはできる。たとえば次のような記述がある。

他のすべての対象の知覚から独立したものとしては、われわれ自身は無である。この理由で、われわれはみずからの視線を外的な対象に向けなければならない。そして、われわれが自分に隣接しているものや似ているものを、何よりも注意して考えることは自然なことである。ところが、自己がある情念の対象であるときには、その情念が消滅してしまい、印象と観念の二重の関係がもはや作用できなくなるまでは、自己について考えるのをやめるのは自然なことではないのである。(T 2.2.2.17, 強調引用者)

ここでは、間接情念が存在していないときには、注意は対象の知覚に向けられていて、自己の観念には向けられていないと言われる。しかしわれわれは常に類似、因果によって結び付けられた「知覚の束」の中にいるのだから、「われわれ自身の観念、というよりむしろ印象は、常に親密な仕方でわれわれに現前している」(T 2.1.11.4)のであって、ここにおいても自己の観念は抱かれていると言える。とするとこれらから言えることは、自己の観念は抱かれているが、その関係に注意が向けられていない場合があるということである。この「注意を向ける」という契機を与えるのは情念であるから、情念のない「想像に関する自己」においては、自己の観念は抱かれているけれども、視線は個々の知覚に向けられていて、この知覚の束に成立している「関係」、「性質」には注意が向けられていない。言い換えると、ここでは個々の知覚しか与えられず、その知覚間に成立している関係と個々の知覚を分けて考えることができない。これは五つの音とそこに成立している時間という関係を区別できないのと同様に、知覚と自己という関係を分けて考えることができない、つまりその関係に「注目」することができない「第二種の関係の観念」であるように思われる。

こうした理解は、ヒュームの自己に関する一見不整合とも見える記述も説明できる。「自己の観念は常に現前している」にもかかわらず、「日常生活においては、自己や人格の観念が、決してそれほど固定された確定的なものではないということは明瞭である」(T 1.4.2.6)という不整合に思われる記述は、「第二種の関係の観念」として自己の観念は常に現前しているが、「第二種の関係の観念」として常に注意されているわけではなく、「確定的なものでない」という風に理解できるのである。

3.2 「情念に関する自己」と「第一種の関係の観念」

情念の対象となる「情念に関する自己」は、誇りによって生み出されるものであった。ここでヒュームは「生み出す produce」を様々な形で言い換えることに注目しよう。情念の対象となる自己は「視線が固定される the view fixes」(T 2.1.2.2)、「視線を向ける direct their view」(T 2.1.2.4)、「注意を向ける turn our attention」(ibid.)、「視線が落ち着く the view rests」(T 2.1.5.3)ところのものである。ここにあるように、情念の対象になるとは、新たな「知覚」をすることではなく、すでにある自己の観念に「視線が固定される」ものである。これは「第一種の関係の観念」における「眺める view」、「目を移す」、「注目する keep in eye」という言葉づかいと重なるように思われる。

言葉づかいが重なっているだけではなくその内実も類比的であるように思われる。「第一

種の関係の観念」の内実とは、他の「類似」した関係の観念と「比較」することで関係の観念が浮き彫りになるということであった。

まず「比較」について。ヒュームは誇りの発生メカニズムに五つの「制限」を加える(T 2.1.6)が、その内の一つに次のようなものがある。

> （誇りや卑下の原因となる）快いあるいは不快な対象は、単にわれわれと密接な関係にあるばかりでなく、われわれ自身に特有なもの、または少なくとも、われわれが少数の人とだけ共有しているものでなければならない。(T 2.1.6.4)

たとえば「健康である」ということは私と親密に関係している事柄であるけれども、皆が健康であるところにおいては、そのことは誇りの原因とはなりえない。「われわれは、対象をそれらに実在する内在的な価値からよりも、むしろ比較から判断する」(T 2.1.6.4) のであって、自らに関係している対象の価値が他と比べて際立っているのでなければ、誇りという情念は生まれない。

しかし「比較」は比較されるもの同士の「類似性」を前提したものでなければならないとヒュームは述べる。次の文は「妬み envy」を説明するものであるが、ヒュームが「比較」に条件づけを加えているところでもある。

> 詩人は、哲学者を妬んだりしないものである。また詩人でも自分とは種類が異なっていたり、時代が異なっていたりしたら妬んだりしないものである。これらの相違はすべて、比較を妨げるかあるいは弱めるかするので、その結果として、情念も妨げたり、弱めたりするのである。(T 2.2.8.15)

ここにあるように、自分と他人を比較するには、自分と他人の間に類似性がなくてはならない。まず他人が自分と類似した身体をもっていないと、または家をもっていないと、自分の身体や家と他人の身体や家を比べることはできない。他人との類似性の無さは、「関係そのものを断ち切ってしまい、われわれ自身とわれわれから遠く離れているものを比較させないようにするか、あるいは比較するにしても、その効果を減少させる」(T 2.2.8.14)のである。

比較する対象間の「類似性」は、先の「類似」「延長」「時間」の観念を抽象する、つまり「第一種の関係の観念」を獲得するための条件にも含まれていた。紫色の点からなる延長という複雑観念は、別の色の点からなるが「類似」した延長の観念と比較することで、

その延長という関係を抽象できるのである。こうした類似性を基点にして、他人のものと自分のものを「比較」することができ、自分の方が優れている[8]場合、誇りという情念が発生し、自己の観念に注意が向けられるのである。以上のように、自己の場合にも関係、性質に「注意」するための「類似性」、「比較」という要素が挙げられていることがわかる。

以上見てきたように、注意が知覚内容にのみ向けられており、その知覚間の関係はそれぞれの知覚と分離して考えることができず、「注意」されることがない「想像に関する自己」と異なり、「情念に関する自己」においては、個々の知覚間に成立している関係（自己の観念をなす類似・因果という関係）を「類似」した他との「比較」を経て、それとして把握する、つまりその関係に「注目」する観点が成立していると言われているように思われる。この「情念に関する自己」は知覚の束を自己として把握するものであるという理解は、「われわれ自身に対する気づかいに関わる」(T 1.4.6.5)、「過去や未来の快苦に対して現在の気づかい concern を与える」(T 1.4.6.19)という「情念に関する自己」の直接的な記述とも符合する。このように、「情念に関する自己」は先に述べた「第一種の関係の観念」であると理解できる。こういった理解をすれば、「情念に関する自己」をヒュームの知覚論の中で理解できるのではないだろうか。

4. おわりに

以上見てきたように、ヒュームは関係の観念について、その関係に注目されていない「第二種の関係の観念」と、その関係に注意が向けられ、抽象された「第一種の関係の観念」という二つの区分ーこれらの二つの観念は別の存在者ではないがーを提示した。こうした区分は、「想像に関する自己」と「情念に関する自己」にもあてはまる。「情念に関する自己」は、「想像に関する自己」を、自己として、類似した他との関係において見る観点が成立しているものなのである[9][10]。こういった理解をすれば、ローティのように「行為者」というヒュームにない語彙を用いずとも、「情念に関する自己」をヒュームの知覚論の中に位置づけられる。また二つの自己が区別されることを「奇妙な現象」（石川, 2011, p.279）と考えなくてもよい。「観念」とそこに見出される観点の獲得プロセスにヒュームはむしろ自覚的であったのである。本稿では、このような解釈をもって、「情念に関する自己」の実質的理解の一つの可能性を示せたのではないか。

註

(1)『人間本性論』からの引用では、ノートン版 (David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. D. F. Norton & M. J. Norton, Oxford University Press, 2000) における巻・部・節・パラグラフの番号を順に表記し、(T 巻, 部, 節, パラグラフ)と示す。訳出に際しては、木曾好能訳, 『人間本性論第一巻 知性について』、石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳, 『人間本性論第二巻 情念について』を適宜参照した。

(2) この先は「自己」に話を限定するために、他者を含みうる「人格」ではなく「自己」で統一することにする。ヒュームは自己と人格を交換可能なものとして用いているように思われる。
(3) ピットソンもこのローティの理解を踏襲している(Pitson, 2002, p.125)。
(4) この区分がヒュームの関係の観念の扱いに通底していることを正当に主張するならば、『本性論』一巻の最大のトピックである因果関係を検討しなければならないが、本稿では論じることができなかった。
(5) 「延長」が「関係」であるというのは理解しがたいかもしれない。このような理解は、ヒュームの最小可感体 minima sensibilia の議論に由来しているように思われる。ロックは延長を単純観念と見なしたが、ヒュームは究極的な単純者を、形や長さをもたない最少可感体であるとした。これによって延長は複雑観念となり、知覚間の関係に存するということになるのである (Garrett, p.61)。
(6) アインスリ曰く、近年の影響力ある解釈によれば、ヒュームの情念論は、道徳を情念・感情によって自然主義的に基礎づけることを試みたものである。しかし、本稿で論じるように情念論は人格論としての側面を色濃く持つ。この点、間接情念論は人格の信念を説明するための理論であり、道徳論よりむしろ人格論に比重が置かれているとするアインスリの立場に同意する (Ainslie, 1999)。
(7) 「この対象とは、自己つまりわれわれがそれについて親密に記憶し、意識している、たがいに関係する観念や印象の継起である」(T 2.1.2.2)と言われているように、この「情念に関する自己」は「想像に関する自己」と全く別のものではない。
(8) この価値判断がある程度共有されていないと、誇りは生まれない。一般規則 general rules としてこういった判断が成立していることをヒュームは誇りの条件として挙げる(T 2.1.6.8)。
(9) ギャレン・ストローソンは「想像に関する自己」にのみ着目し、そこで自己への「注意」の問題に対して苦心しているが、以上みてきたように、注意という問題には「情念に関する自己」への着目が欠かせないように思われる (Strawson, 2011, pp. 84-94)。
(10) このような考えは、自己論に特化した論述はないものの、「類似の個物との関連において位置づけられた個別的な知覚を表す」ような「一般的観点」がヒューム哲学の基調を成すと考える矢嶋 (2012, p.24) の解釈に示唆を受けたものである。

文献

Ainslie, D. (1999). 'Scepticism about persons in BookⅡ of Hume's Treatise', *Journal of the History of Philosophy*, 37, 3, 469-492.

Garret, D. (1997). *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, New York: Oxford University Press.

Hume, D. (2000). *A Treatise of Human Nature*, ed. D. F. Norton & M. J. Norton. Oxford: Oxford University Press. (1995, 木曾好能訳, 『人間本性論第一巻 知性について』, 2011, 石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳, 『人間本性論第二巻 情念について』, 法政大学出版局.)

Pitson, A. (2002). *Hume's philosophy of the self*, London: Routledge.

Penelhum, T. (2000). *Themes in Hume: the Self, the Will, Religion*, New York: Oxford University Press.

Rorty, A. O. (1990). 'Pride produces the idea of self: Hume on moral agency', *Australasian Journal of Philosophy*, 68, 3, 255-269.

Strawson, G. (2011), *The Evident Connexion: Hume on Personal Identity*, New York: Oxford University Press.

石川徹(2011). 「ヒューム『人間本性論』における情念論」,『人間本性論第二巻 情念について』, 法政大学出版局.

木曾好能 (1995). 「ヒュームの理論哲学」,『人間本性論第一巻 知性について』, 法政大学出版局, 367-616 頁.

矢嶋直規 (2012). 『ヒュームの一般的観点』, 勁草書房.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕